

注意点1

理論

**足踏みを一定に保ち
リズムを正確に取るべし**

パーカッション・タッピングは、その名のとおりパーカッションを叩いているようなテクニックのため、基本的に16ビート・フィーリングになることが多い。したがって、弾き手がグルーブをコントロールできないと、フレーズが“こけてしまう=崩れてしまう”のだ。リズム感が悪い、いわゆる“リズム音痴【註】”の人の演奏を見ていると、演奏中にテンポを取っている足のステップ（カウント）が乱れていることが多い。4分音符のタイミングで足踏みを入れて、身体で16分音符を感じ取るように心掛けよう（図1）。パーカッション・タッピングは、一見複雑に見えるが、しっかり足踏みしながらリズムを取れば必ず弾けるようになるはずだ。

図1 足踏みによるカウント

・メイン・フレーズ2小節目

基本となるビート（16ビート）

... 音の区切りで足踏みを入れる

... 4分音符のタイミングで足踏みを入れる

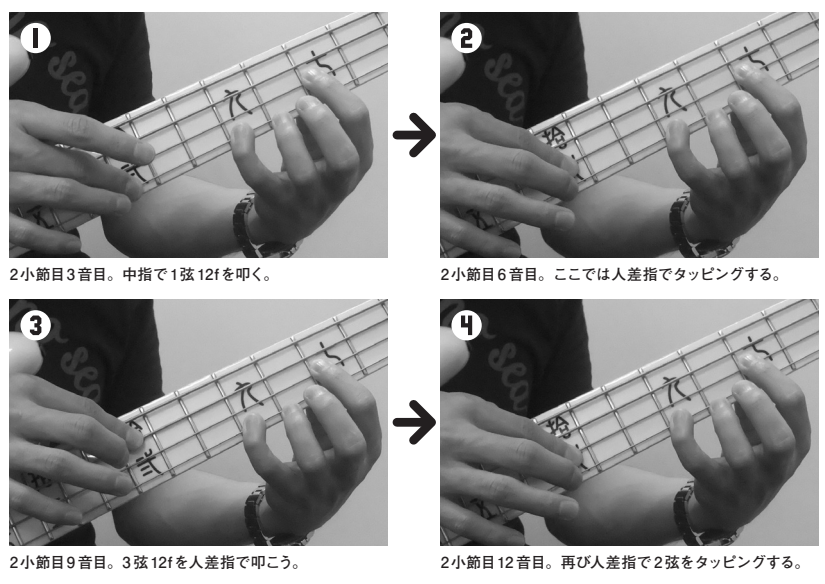
音の区切り方が変則的なポリリズム風フレーズは、特に足踏みが乱れやすいので気をつけよう。

注意点2

右手&左手

**アクセント音を
右手でしっかり叩くべし!**

このメイン・フレーズの模範演奏を聴くと、かなりトリッキーに感じられることだろう。しかし、使っているフレットは7・9・12フレットしかなく、この3つのフレットを弦移動しながら複雑な譜割りで演奏することで、強烈なインパクトを生み出せるのだ。フレーズのアクセントはすべて右手になるが、フレーズの抑揚を理解しておく、より模範演奏に近い演奏ができるようになるだろう。2&4小節目は16分音符の3音フレーズ=ポリリズム風パターンになっている。3音目に右手のタッピングを入れるということを意識しながら演奏しよう（写真①～④）。



～コラム27～

将軍の戯れ言

ここでは、筆者のタッピング時の音作りを紹介しよう。筆者は、普段マルチ・エフェクターを使用していて、マルチ内のエフェクターの順番はコンプレッサー→パラメトリック・イコライザー→コーラス→ディレイ→リバーブとなっている。コンプレッサーの設定は、音を少しつぶし気味で、サステインを多めにしている（実はタッピングに限らず、どのサウンドでも一定）。イコライザーは、ハイを強調し、ミドルがやや高く、ローは大きくカットという設定だ。コーラスは音が揺れ過ぎず、広がりを感じさせる程度にしている。ディレイはディレイ・タイムを314ms付近に合わせ、リバーブは、エフェ

**タッピングをクリアに聴かせる
著者のエフェクターの設定を紹介しよう**

クト・レベルが大きいと音が遠くなるので、あまり深く掛けないようにしている。最後に注意してもらいたいポイントが、マスター・ボリュームだ。タッピングはもともと音量が小さくなりやすいテクニックのため、タッピング用のパッチは多少ボリュームを上げておくとよいだろう。エフェクターは、ベース・アンプのスピーカー次第で掛かり具合が大きく変わってしまうものだ。その時の状況に合わせて臨機応変に微調整しながら対応しよう。自分が一生懸命弾いたフレーズをきちんと観客の耳に届けるためにも、音作りには細心の注意を払うようにしてもらいたい。



著者も使用しているボスのGT-10B。ベース本体の原音を生かしながら、多彩なサウンドを生み出せる。

【リズム音痴】 ジャストのタイミングで演奏しているつもりでも、微妙に前ノリや後ノリになってしまうことはある。リズム感を正すためには客観的な耳を持つことが大切なので、日々演奏を録音して聴き返すように心掛けよう。